

新緑が目鮮やかな季節となりました。お寺木々も青々と繁り、訪れた人の心を和ませています。お寺をお参りされる方も多くなり、新緑だけでなく杜若や菖蒲などの花を楽しむ人で賑わいます。

お参りをされる方々を迎えるお寺は、庭の掃除をして、来てくださった方が気持ちよく散策できるようにいたします。

庭掃除は五月に限りません。秋の落ち葉掃きから、冬の庭木の剪定。春先に草が伸びて来たらきれいに整え、夏はお盆を控え、秋のお彼岸には再び掃除と、お寺では一年中、何かしらの掃除をしていることとなります。

あるお坊さんのお話です。そのお坊さんが弟子として修行を始めた頃、慣れない庭掃除をしていると、「なぜこんなにきれいにしなくてはいけないのか?」「どうせ、また草も伸びるし落ち葉も散るのに、今掃除しなくても良いのではないか?」と思うことがあり、そしてついつい怠けていました。

それを見たお師匠さんが「また草が伸び、落ち葉が落ちても、今きれいに掃き清めることが大切なのだ。どうせまたお腹が空くからといって、ご飯を食べないということがあるか?」と諭したのです。

庭掃除は、お寺をお参りする方のためだけではなく、自分自身の修行でもあったのです。

中国 唐の時代に、百丈禪師という方がおりました。

百丈禪師は、若き修行僧の時から住職となり亡くなるその日まで、掃除となれば、若い弟子たちと同じように力をこめて努めていました。弟子たちは、禪師の体のことを気遣い、気の毒に思っていました。

みかねた弟子たちは、ある日、禪師の掃除道具を隠してしまいました。

道具がなくなり、その日なにもできなかったことを悔やんだ百丈禪師は、一日食事を取られなかったそうです。

その日、自分自身がすべきことができなかったからでした。

禅宗では、掃除のことを「作る」に「務める」と書いて「作務」といいます。禅宗において「作務」は、とても大切な修行なのです。

禅宗の庭を見て心が落ち着くのは、ただ単に庭がきれいだけでなく、「作務」という修行を、お坊さんがしているからなのではないでしょうか。